

Use of Japanese Expressions by freshman at Aichi Toho University and Its Pedagogical Implications

journal or publication title	Journal of Aichi Toho University
volume	43
number	2
page range	183-186
year	2014-12-10
URL	http://doi.org/10.20728/00000361

新入生の日本語表現に見られる特徴と指導上の留意点

小 野 純 一

愛知東邦大学

新入生の日本語表現に見られる特徴と指導上の留意点

小野 純 一

目 次

1. はじめに
2. 特徴・留意点
3. おわりに

1. はじめに

「日本語表現Ⅰ」は「東邦基礎Ⅰ」の後継科目であり、本学新入生の日本語表現能力の向上を主な目的として開講されている。筆者は新入生の日本語表現能力を把握するため、1回目の授業において「自己紹介」をテーマに自由に文章を書かせた。

(制限時間60分間・レポート用紙(A4判・30行)各1枚使用・調査対象:50人分)

本稿では、新入生の日本語表現能力を「誤字・癖字」「語彙・文体」「内容・構成」の3点から分析し、そこに見られる特徴と指導上の留意点について概説する。

2. 特徴・留意点

(1) 誤字・癖字

手書きをすることによって、基本的な記述能力が養成される。また、手書きをさせてしばらくすると私語が無くなり、クラス全体が落ち着き始める。さらに、「報告書」「履歴書」「実習日誌」など、現在においても手書きをする場面は数多くある。このことから、「日本語表現Ⅰ」ではパソコンを使わず、あえて手書き(下書き(鉛筆)・清書(ボールペン))をさせている。

手書きをさせて明らかになるものに誤字(送り仮名の誤用)があるが、それは今回の「自己紹介」においても数多く見られた。具体的には以下の通りである。

「鑑償(鑑賞)」「橋正(矯正)」「結講(結構)」「誤楽(娯楽)」「最底(最低)」「任事(仕事)」「選校(選考)」「全盤(全般)」「荒てる(慌てる)」「叫える(叶える)」「切する(接する)」「以外と(意外と)」「最年小(最年少)」「楽感的(楽観的)」「言葉遣い(言葉遣い)」

「話し(話)」「選らぶ(選ぶ)」「新たな(新たな)」「悔やしい(悔しい)」「接つする(接する)」

さらに、「人の為に」「そんな風に」「よくない所」「話せる様に」「出来なかった事」のように漢字を多用したり、漢字で書くべきところを平仮名で書いたりしているものも数多く見られた。

「きかい（機会）」「ことし（今年）」「しかく（資格）」「しゅみ（趣味）」「とくい（得意）」「えんそう（演奏）」「ぎょうじ（行事）」「けんがく（見学）」「さいきん（最近）」「てきとう（適当）」「くて（苦手）」「観こう（観光）」「発さん（発散）」「あんき物（暗記物）」「計画てき（計画的）」

この点を改善するためには、「安易に平仮名で書かず、自信が無ければ辞書で確認すること」を習慣付ける必要がある。また、よく見られる誤用については、「小テスト」などによって、まとめて指導しておくのが効果的である。

一方、癖字については、「す」「ふ」「ね／れ／わ」などに特徴的な書き方が見られるが、これについては多くの学生が指導を受けていないので、問題があれば個別に指導するのが望ましい。また、字の大きさや筆圧についても注意が必要である。ボールペン書きに慣れていない学生も多く、下敷き用の紙を渡すと喜ばれる。

ただし、数年前と比較すると、乱雑な文字で書かれたものは著しく減少し、美しい文字で書かれたものが増加している。美しく書く学生は、そのほとんどが「前列に座る」「授業に集中する」「出席状況が良い」「課題をきちんと提出する」「プリントを適切に管理する」など、ほかの点においても優れている。きちんとした文字で書かせることが何よりも重要であると言える。

(2) 語彙・文体

「自己紹介」はレポートではないが、大学の授業で書く以上「アカデミック・ジャパニーズ」を用いるのが望ましい。また、「日本語表現Ⅰ」は初年次教育の一翼を担っており、本学に入学したばかりの学生に「アカデミック・ジャパニーズ」を指導することが求められている。

筆者は、小野・藤重（2012）小野・藤重（2013）において、「やる」「一番」「友達」「とても」「色々な」「頑張る」「たくさん」「ですが（接続詞的用法）」「なので（接続詞的用法）」などが学生の書く文章に頻出することを指摘したが、この傾向は今回の調査においても見られた。また、「僕」「大好き」「かなと思っています」も使用頻度が高く、文章が幼稚に感じられる一因となっている。「車校（自動車学校）」「バイト（アルバイト）」などの省略語も多い。

「一番（6人）最も（0人）」「友達（19人）友人（2人）」「とても（22人）非常に（1人）」「なので（10人）このため（0人）」「色々な・色んな・いろんな（9人）様々な（1人）」

しかしながら、「お友達」「お年寄りの方」「アーティストさん」や「常に」「現在」「しかし」「やはり」「幼い頃」「学びたい」「全てにおいて」「多くの資格を取得し」「野球やサッカーなど」「大学に進学するにあたり」などの表現が用いられていることや、全ての学生が「デス・マ

ス体」のみで書いていることから明らかなように、学生も丁寧な表現で書こうとはしている。ただし、学生の認識している丁寧な表現は「アカデミック・ジャパニーズ」ではなく「敬語」であるため、指導に際しては安易に「丁寧な表現（改まった表現）で書くように」と指示するのではなく、早い段階で「全部→全て／全然→全く」のような「対照表」を作成しておき、それを見ながら書くよう指示するのが望ましい。「対照表」を見せることによって、多くの学生が「こう書けばいいのか」と納得している。なお、レポートにおいては「普通体（デアル体）」が用いられることについても触れておかなければならないが、その場合は「普通体（デアル体）」について説明するとともに、「ダ体」「デス・マス体」と混用させないように注意が必要である。

(3) 内容・構成

テーマが「自己紹介」であるため、「将来の夢（大学生生活の抱負）」(37人)「出身地・出身校の紹介」(29人)「小学校・中学校・高等学校で行ったこと」(26人)「趣味」(25人)「性格」(23人)「好きな(嫌いな)食べ物」(16人)について書いた学生が多い。

このうち「将来の夢」については「小学校教諭」「中学校教諭（保健体育科）」を、「趣味」については「野球」「サッカー」を多くの学生が挙げている。性別・専門を問わず、部活動などにおいてスポーツを長く続け、卒業後もスポーツに関する職業に就きたいと考えている学生が多くこのことはレポートやスピーチのテーマを決めるうえで参考になる。ただし、1年生の段階においては、読書などを通して、多くの分野に関心を持たせることも重要である。

「性格」については「スポーツ（部活動）を通して明るい性格になった」と自己分析する学生がいる一方で、より多くの学生が「人見知りをする」「知り合い以外には、あまり話しかけない」と述べている。これを改善するには多方面からのアプローチが必要であるが、少人数のグループ（3－5名程度）内で意見を述べ合う活動は、クラス全員（30名程度）に対する発表よりも取り組みやすいようである。また、「面倒を見てくれる人がいないと駄目だ」「寂しがり屋で、誰かがいないと落ち着かない」と述べている学生もいる。自信の無い学生が多いためか、褒めると想像以上に喜んでもらえる。本学はスローガンとして「スゴチカ」（学生と教職員の距離が近いこと）を掲げているが、褒めることによって出席状況が改善したり、より長い文章が書けるようになったりする。良いところを認めていく指導が本学の学生には向いているようである。

【例1】「自己紹介」

はじめまして！ 僕は名古屋市名東区出身です。血液型はA型で、好きな食べ物は
焼肉とラーメンです。しゅみは体を動かすことです。小学生の時から野球を
やっています。なので、大学でも野球を続けようかなと思っています。
ですが、人見知りをするので、みんなとうまくやっていけるか心配しています。
こんなぼくですが、どうぞよろしくおねがいします。

この文章（例1）は「自己紹介」によく見られる表現をまとめたものである。右端に多くの空白があるが、これはほとんどの学生（37人（74%））の作文に見られる特徴である。この理由について、学生は「なんとなく」「早く書き終えたい」「単語が途中で切れるのがいやだ」などと述べている。また、30人（60%）もの学生が半分（15行）ほどしか書いていない。

【例2】「大学生生活の抱負」

私は大学でいろんなことをしてみたいです。高校の時までずっとサッカー部にいた
から、大学でもがんばろうかなと思っています。英語とかの資格も取るつもり
です。バイトもいっぱいやるつもりです。とりあえず簡単そうなコンビニの
バイトから始めてみます。それから海外旅行にも行きたいです。色んな事したら
友達がたくさん来て、大学生生活が面白くなると思います。

この文章（例2）は「大学生生活の抱負」の部分によく見られる表現をまとめたものである。長い文章が書けない理由としては、「文章構成を考えず、いきなり書き始める」「それぞれの事柄について詳しく述べていない」などが挙げられる。これを改善するためには、小野・藤重（2012）で紹介した「序論」「本論（「まず（第1に）」「次に（第2に）」「最後に（第3に）」）」「結論」を用いて書かせるのが効果的である。ただし、「何を書いたらいいんですか」と繰り返し尋ねられるので、予めモデル文を配付しておいたり、書くべき内容を考えさせたりしておく必要がある。また、「5W1H」を意識させたり、「例えば、AやBなど」を用いて具体例を書かせたりすると比較的容易に長い文章が書けるようになる。さらに、レポート用紙に太い線を引いておき、そこまでは必ず書くよう指示しておくこと、途中で書くのをやめてしまう学生がいなくなる。

3. おわりに

新入生の書く文章には、「誤字・癖字」「語彙・文体」「内容・構成」の全てにおいて共通の特徴が見られる。教員がこの点を十分に把握することによって、「アカデミック・ジャパニーズ」をはじめとする様々な日本語表現を効率的に指導することができる。

引用文献

- [1] 小野純一・藤重育子（2012）「子ども発達学科における言語表現の指導」『東邦学誌』第41巻 第3号 愛知東邦大学
- [2] 小野純一・藤重育子（2013）「子ども発達学科1年生の言語表現に見られる特徴」『東邦学誌』第42巻 第1号 愛知東邦大学

受理日 平成26年10月1日